

年 頭 の 辞

農林水産技術会議事務局研究総務官 川嶋良一

あけましておめでとうございます。

昭和52年の年頭にあたり、植調関係の皆さまの御多幸と御健康を心から祈念するとともに、植調のより一層のご発展を期待いたします。

昭和52年という年がどういう年になるのかは、もちろん誰も知るよしもありませんが、そこに抱負や展望をもち、お互に努力をかさねる余地もあろうかと思ひます。雑草防除の進歩が戦後、驚くべき発展をつづけてきたことはいまさらいうまでもありませんが、この勢いが今年はさらに飛躍的に前進するであろうこと、そのためにお互に努力しようではないかということ、そして、その中心が植調であり、また、そうであらねばならないことは万人の認めるところでありましょう。

とくに今年は、私ごとで恐縮ですが、昭和23年に農事試験場鴻巣試験地に入場して、新設もない雑草防除研究室で荒井正雄研究室長から、はじめて雑草研究の手ほどきをうけ、2,4-Dと出合った年からかぞえて、まさに30年になるという記念すべき年であります。この30年はまた、2,4-Dにはじまる除草剤発達史でもあり、2,4-Dを武器にわが国の普及事業の基礎がたみができた農業改良普及事業発足後の発展史でもあります。

さらに、農業改良助長法にもとづいて、わが国の研究行政も昭和23年に大きな変革をとげ、農林省に農業改良局が設置され、研究企画官(い

わゆるPL)時代のはじまった年でもあります。PL制度は、いまは農林水産技術会議事務局の研究管理官制度として存続発展しておりますが、ちょうど発足の年に入省した者が、くしくもその総括整理の任にあるということも、1個人の感慨をこえたものがあるような気がいたします。

いずれにしましても、昭和23年からの30年めの昭和52年という年は、いろいろな意味で、私にとっては、公私ともに重要な意義をもっている年という気がいたしますが、この記念すべき年に、雑草防除なり、除草剤の研究の発展のために微力をつくしたいと心を新たにしている次第であります。

こうした意味で、国の試験研究のなかで雑草や除草剤の研究が、外部の努力・発展にくらべて、十分な体制にあるとはいえないのが残念であり、この点の強化が今年の私どもの努力目標であろうかとも思っております。ある意味では、植調の努力・発展のかけにかくれてしまって、国としての必要な努力を怠ってきたのではないかと、とさえ反省させられるものがないわけでもありません。

新しい年のはじめの^{とろろ}屠蘇気分^{とろろ}で、勝手な私ごとなどでお目をけがして恐縮でございましたが、植調ならびに関係各位の一層のご発展を重ねて祈念申し上げて年頭の辞といたします。